

第1章

漢方処方を使い分けは結構面倒だ



初めまして。中外と申します。



あ、今度ウチで漢方の研修をされる内科の先生だね。待っていたよ。で、君は医師になって何年目？



6年目です。



漢方薬を実際に使うことはあるの？



はい。



どんな処方¹⁾をよく使うの？



処方、ですか？



漢方薬のことさ。



一番よく使うのは六君子湯^{りっくんしとう}ですね。胃によい処方ですし。あとは、感冒に葛根湯^{かつこんとう}とか、女性の不定愁訴^{ふていしゆそ}の方に当帰芍薬散^{とうきしやくさん}とか、高齢者の腰痛持ちの方に八味地黄丸^{はちみじおうがん}とか。



ほう、結構使っているんだね。



使ってはいるんですけども、実は見よう見まねなんです。そもそも漢方薬には種類がたくさんありすぎて、どれをどう使ったらよいのか、実はまだ全然わかっていないのです。

Note 漢方医は、各漢方薬を「処方」とか「方剤」などと呼ぶ習慣がある。現代では、ひとつの漢方エキス製剤がひとつの処方ということになる。



まあ、どれを使おうか迷っちゃうよな。



はい。その辺りをきちんと勉強したいんです。よろしくお願いします！



了解。ところで、いま漢方処方たくさんありすぎる、って言ったけれど、何処方くらいあるか知ってる？



さて？ 下敷き²⁾を見ると、100はあると思いますが…。



ハハ。実は僕も知らないんだけど、漢方処方は星の数ほどあるよ。大昔から作られて、使われてきたのだから、途中で消滅した処方もあるんだろうね。



そうなんですか…。



うん。さて現在の保険診療上で我々が実際に用いているのは、147種類なんだ。外用薬の紫雲膏しうんこうを入れれば、148種類になるね。



そんなにあると、やっぱり使い分けるのは大変ですね。たとえば高血圧こうけつあつの患者に何を処方しようかと考えてみても、保険適応になる漢方処方おうれんげは黄連解毒湯おうれんげどくとう、大柴胡湯だいさいことう、七物降下湯しちもつこうかとう…いくつかありますね。



おおっ！ 結構知ってるなあ。で、高血圧ならばどの漢方処方を用品いてもいいの…？



いえ…。もちろんそんなはずはないですよ。一般薬でも、Ca拮抗剤、アンジオテンシン受容体拮抗剤、β遮断剤…などそれぞれ病態に応じて使い分けるのが普通ですから。



そうだね。漢方でも使い分ける。この使い分けについては、漢方にはいろんな流派があるのだが、流派を問わず、それぞれの流派でやかましく言われている。逆に使い分けが甘い、無いものは漢方医学とは言えないね。



この使い分けが「鑑別診断」といわれるものですよ。使い分けのポイントとなるのは何ですか？



その拠り所となるのが「証しょう」なんだ。証というのは、聞いたことあるよね。



はい。漢方独自の用語で、患者の訴え、他覚所見などを総合して得られるもの、だったでしょうか。

Note

各漢方薬メーカーが発行している、処方別効果効能の表のこと。A3版くらいの下敷き状になっているので、こう呼んでいる。患者さんへの説明の時など、一目瞭然で便利である。



そのとおり！ よく知っているなあ。証というのは、言ってみれば「**症候の複合体**」みたいなもので、もちろん現代の病名とは全く別次元の概念だよね。診察を通じて患者の証をしっかりと把握する。



証というのは、症候の複合体、ですか。なるほど！



それぞれの証に合った処方が、長い漢方の歴史の中でそれぞれ用意されているからそれを用いる、というのが「**方証相對**」^{ほうしょうそうたい}とって、日本漢方、特に古方派のやり方なんだ。



証と処方が1対1、ですか。



まあ、多対1だね。もう少し流動的な処方の運用の仕方をする流派もあるよ。漢方エキス製剤じゃ無理だけど、煎じ薬だと処方をいじることもあるよ。中には、これは何の処方だったっけ、と原形をとどめなくらいいじることもあるね、これは僕のことだけど。



そうなんです。つまり、目の前の患者には、なぜこの処方がよくて他の処方ではダメなのか、ははっきりさせようというのが鑑別診断、ということですね。



そう。でも、この鑑別診断が結構ややこしい。例えば、「感冒のとき、悪寒があって発汗があれば桂枝湯けいしとうにする。しかし、発汗がなくて肩が凝ってれば葛根湯かつこんとうがよく、さらに節々が痛む場合は麻黄湯まわうとう…」という具合にやるんだが…。



147種類のエキス製剤について、それも頭ごなしに、鑑別診断法をだらだらと記憶するんですか。量が多くてたいへんですね！



そうだろう？ 仮にすべての処方についてまる覚えできたとしても、そんなのは間違いのもとだから、僕は絶対にお勧めしないよ。



でも、頭に入れていらっしやるんでしょう。



もっとも、昔からこういうマル暗記用に口訣^{くけつ}³⁾とか歌訣^{かけつ}⁴⁾というものがあって、覚えやすいように短い言葉で各処方の適用をまとめてあるんだけど、これも面倒で、かなり端折ってあるので情報量が少ないし、そもそも全

Note 各処方の運用のコツを、簡潔にまとめたもの。江戸時代の漢方医がよく作った。
3

Note 口訣と内容は似ているが、漢詩のような形式になっていて、暗誦に便利である。主に中国でつくられた。
4

く科学的じゃないから、やはりマル覚えは勧めない。



では、どうすればよいんですか？

◆ 漢方処方についての理解の近道とは—漢方処方と生薬



ところで、漢方処方は^{しょうやく}生薬という成分からなっているのは知っているよね。



生薬というのは、薬草ですよね。



イメージとしてはそうだね。生薬というのは、自然に存在するいわゆる草根木皮や、鉱物、動物の身体の一部などを、水で洗浄して乾燥させるか、あるいはそのままで用いるものだな。自然界にあるものの中から、薬として使えるものを長年かけて選び出したものが生薬だよ。



本場中国では何千という生薬が用いられているそうですね。テレビで、生薬が市場で売られているのを何度か見たことがあります。トカゲの干したのも映っていました。野山に生えているものも多いですよ。そのあたりで採取しているんでしょうか。



ハハハ。医療・漢方薬に用いられる生薬は、定められた基準を満たしたもののしか使われないし、その後もきちんと管理されているよ。その辺で採ったものなんか、絶対に使わない。現在わが国ではさすがにトカゲは使われないよ。



やはりそうなんですね。安心しました。ところで先生、生薬というからには当然、薬としての効果があるんですよね。



もちろんさ。薬効成分もかなり同定されているよ。天然化合物だね。でも未知の成分、天然化合物がまだあるだろうと言われている。たとえ既知の成分であっても、作用がまだ完全には解明されていないんだ。



えっ！ そうなんですか。昔から使われているのに。



そうなんだ。それで、ほとんどの生薬は多数の成分を含むから、その作用は複合的なはずだね。一つの生薬が、無数の作用をもつ。



そうでしょうね。どうやって使いこなすんでしょう。



1個1個の天然化合物の作用を気にしていたら気が遠くなるよね。だから、現在の漢方では、生薬を最小単位として、生薬 whole の作用としていくつ

か示すのが一般的だね。



よくわかりました。ところで、複数の生薬を、古典に書かれている通りに組み合わせたものが漢方の処方ということですよ。



そのとおり。これは、とっても当たり前のことなのだけれど、この当たり前なことがなぜか、漢方薬を処方する際に忘れ去られているような気がするのは僕だけだろうか。



そうなんですか？



そうなんだよ。おいおい話すけど。



はい…。ところで、さっき仰った「こういう場合は葛根湯！」、あるいは「葛根湯というのはこういう薬！」というお話ですが…。



感冒の話だね。



ええ。確かに頭ごなしにそう言われても、その処方が“なぜ”よいのか、その処方は“なぜ”そういう効果を持つのかについての本質的な理解がないと、西洋医学を学んできた私たちには、ぜんぜん腑に落ちないのですよ。



それはそうだろうね。この“なぜ”の部分抜いたマル覚えによる漢方処方の選択は、ぜんぜん科学的でないよね。…と僕はいつも批判しているんだけど、「それが漢方というものだ」と言う偉い先生も少なくないんだよ。



そうなんです。そろそろここいらで、なぜその処方がよいのかを本質的に理解したいです。



それなら、その処方の成り立ち、性質、性格を知っておけばよいんだ。そのためには、それぞれの処方を構成する個々の生薬について理解しておかなければならないだろうね。



そこでさっきの、生薬を最小単位として、生薬 whole の作用として…というお話につながるんですね。



さっきの話は、個々の化合物じゃなくて、生薬としてひとまとまりに、という話だよ。今度は逆だ。



あ、わかりました！ ある漢方処方の効果は、その構成する生薬を最小単位として、その組み合わせとして説明がつく、という理解でよろしいでしょうか。



そう。現時点では十分、OK だ。大事なことからもう一度言おう。漢方処方はいくつかの生薬からなる。ということは、それぞれの処方の作用は、